

ロジックで進める リウマチ・膠原病診療

萩野 昇【著】

評者

川島篤志

市立福知山市民病院研究研修センター長・総合内科医長

「血液培養も採らずに、やれリウマチ性多発筋痛症とか、やれ巨細胞性血管炎とか言っている臨床医のなんて多いことか。そんなことをしていると、Huggy に叱られますよ！」そんなセリフが聞こえてきそうである。「リウマチ・膠原病」と聞くと裏口から逃げ出したい感情を抱く医師に、笑顔をもたらししてくれる、奥深い読み応えのある書籍が現れた。

◆付箋をつけて診察室に置いて

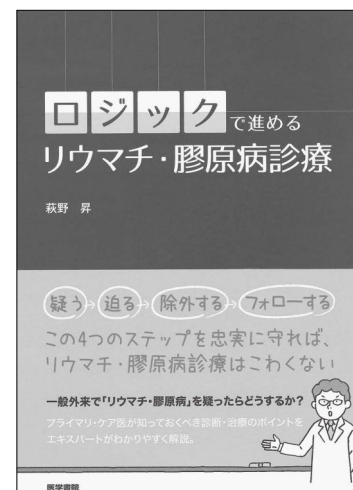
おきたい

プライマリ・ケアの現場で遭遇しそうな親しみやすい状況を描いた巻頭の12ページは、綴じ込み付録のように切り出して使いたい！ 続いて「診察・アプローチ」別にテンポよく読み進めていける。とにかく図表が秀逸であり、付箋を付けて診察室に置いておきたい。突然、波長の異なるやり取りが始まり、思わず飛ばそうかな、

となったところで、クギを刺されるコメントを見つけると、筆者に心を見透かされた気分になる。

随所に出てくる「Huggy's Memo」は、ロジックを余すことなく開陳してくれている筆者の痛快な講演でのつぶやき（a.k.a. 心の叫び？）のようにベテラン医にも響く。「ゴメン」的に可愛いものもあれば、重く深いコメントもある。先人の業績への配慮も素晴らしい。

Common diseaseである関節リウマチへのアプローチでは、診断だけでなく長期的な視点にも言及しており強い共感を覚える。あえて生物学的製剤を外した、薬剤の使い方も膠原病医とタッグを組む可能性のあるプライマリ・ケア医に優しく深い視点で記載されている。「疑わないと見つからない」疾患への診断とマネジメントでは、「疑う→迫る→除外する→フォローする」というこの書籍の根幹に触れることができる。



◆関節症状を診ることがある医師には必読

さて、これは誰のための書籍であろうか？ 関節症状を診る、細かく言及すれば「リウマチ性多発筋痛症」を鑑別診断に挙げる医師には必読と言いつつ、Huggyもこう言うに違いない。「今こそ、リウマチ・膠原病に少しでもかかわる医師に伝えたい。この書籍をぜひ手にしてください。明日から『患者さんの笑顔』が漏れなく付いてきます！」と。

B5判・頁176

2018年3月

定価：本体3,800円＋税

【ISBN978-4-260-03130-1】

医学書院刊